

特集 中南米

ラテンパワーで 開く未来

2014 FIFAワールドカップ。
世界中が固唾をのんで見守るこの大会の舞台は、
地球の反対側にあるブラジルだ。
地理的にも遠く、時差も約半日。
しかし実は、中南米と日本は深いつながりがある。
そのつながりをひも解いてみよう。

編集協力：細野昭雄 JICA研究所シニアリサーチアドバイザー

中南米に渡った ニッポンジン

ブラジルで開催される2014 FIFAワールドカップ。リアルタイムで観戦したいけれど、時差があるからどうしよう…と悩んでいる人も多いはず。ブラジルは遠く離れたところにある国。そんなイメージを持つのも無理はない。実際に、地理的に地球の反対側にあるのだから。

しかし実は、ブラジルを含む中南米と日本は古くから密接な関わりがある。それは「Japoneses Garantido」

という表現に象徴される。ポルトガル語で「日本人は確実に信頼できる」という意味で、ブラジル国内でよく使われているそうだ。

その理由を探るには、今から100年以上も前にさかのぼらなければならぬ。日本がまだ貧しかった時代、異国での成功を夢見て、1897年にメキシコ、99年にペルー、1908年にブラジルへの集団移住が行われた。日本からそれぞれの地に渡った人々は、田畑を耕し、職を得て、慣れない環境の中で懸命に働いた。そんな彼らの姿を目の当たりにした

メキシコ

首都: メキシコ・シティ
面積: 196万km ² (日本の約5倍)
人口: 1億2,080万人 (2012年)
言語: スペイン語
主要産業: 製造業、鉱業、運輸・通信業
1人当たり国内総生産 (GDP): 9,749ドル (2012年)

→ 8ページへ

エルサルバドル

首都: サンサルバドル
面積: 2万1,040km ² (九州の約半分)
人口: 629万人 (2012年)
言語: スペイン語
主要産業: 軽工業 (繊維縫製)、農業 (コーヒー、砂糖など)
1人当たり国内総生産 (GDP): 3,790ドル (2012年)

→ 24ページへ

ペルー

首都: リマ
面積: 約129万km ² (日本の約3.4倍)
人口: 2,999万人 (2012年)
言語: スペイン語、ケチュア語、アイマラ語など
主要産業: 製造業、農牧業、石油・鉱業
1人当たり国内総生産 (GDP): 6,796ドル (2012年)

→ 14ページへ

ボリビア

首都: ラパス (憲法上の首都はスクレ)
面積: 110万km ² (日本の約3倍)
人口: 1,050万人 (2012年)
言語: スペイン語、ケチュア語、アイマラ語など
主要産業: 天然ガス、鉱業 (亜鉛、鉛、錫)、農業 (大豆、砂糖、トウモロコシ)
1人当たり国内総生産 (GDP): 2,576ドル (2012年)

→ 12, 30ページへ

ブラジル

首都: ブラジリア
面積: 851.2万km ² (日本の22.5倍)
人口: 1億9,870万人 (2012年)
言語: ポルトガル語
主要産業: 製造業、鉱業 (鉄鉱石他)、農牧業 (砂糖、オレンジ、コーヒー、大豆他)
1人当たり国内総生産 (GDP): 1万1,340ドル (2012年)

→ 16, 18, 20, 22ページへ

パラグアイ

首都: アスンシオン
面積: 40万6,752km ² (日本の約1.1倍)
人口: 669万人 (2012年)
言語: スペイン語、グアラニー語
主要産業: 農牧業 (綿花、大豆)、牧畜業 (食肉)、林業
1人当たり国内総生産 (GDP): 3,813ドル (2012年)

→ 39ページへ

特集 中南米 ラテンパワーで開く未来

い国も多い。「まず、資源が豊富な国とそうではない国で大きな違いがあります。さらに、各国での都市と地方の格差も顕著です」と細野さんは話す。メキシコやブラジルなどでは、産業の高度化のためのインフラ整備や人材育成、ボリビアやパラグアイなどでは、貧困削減に向けた取り組みが優先して進められている。そして、急速な都市化に伴う運輸交通、上下水道などの整備の遅れへの対応は共通の課題だ。

日本にとって重要な「パートナー」でもある中南米。日系人や企業活動を通じてつながりを深めてきた日本だからこそ、この地域の持続的な成長のためにできることがあるはず。そこで現在、それぞれの国のニーズに応じて、JICAのイニシアチブにより、さまざまな取り組みが進められている。

その柱は3つ。産業基盤を支えるインフラ整備、先端科学技術や日本の経験を生かした地球規模課題の解決、貧困削減や農村開発を目指した



『ブルーガイド・ボシェ ブラジル』
(実業之日本社 1,404円)

現地観戦に必須! ブラジルの“今”を知ろう

ブラジルにサッカー観戦に行く人、ワールドカップには間に合わないけれど観光に行きたい人などにオススメの一冊。国際協力を通じて現地の事情を知り尽くしたJICA職員が編集に協力したこのガイドブックには、現地で役立つ情報が満載だ。ブラジル日系社会についての解説も必見。持ち運びに便利な手のひらサイズ。

格差是正だ。それらはまさに、日本国内の大学や研究機関、NGO、企業などと連携したオールジャパンの挑戦だ。「中南米の豊かな資源と経済力のポテンシャルは、日本が成長していく上でも重要です。国際協力を通じて、中南米と日本のパートナーシップが多面で強化されれば」と細野さんは期待を込める。

地球の反対側で見つけた日本とのつながり。そこから何か、未来につながる変化が生まれそうだ。

現地の人々の間では、「日本人になら何を選んでも安心だ」という意識が広まっていった。これがまさに「Japones Garandito」だ。

そして第二次世界大戦後、見事復興の立役者となった日本企業の多くが、新たな進出先として選んだのも中南米だった。日本の自動車メーカーはその先駆け。まだ開発途上にあつた中南米で粘り強く投資活動を続け、現地の人を育て、この地域の自動車産業の発展に多大な貢献を果たした。「メキシコ、ブラジルなどの中南米諸国は、日本企業の後押しもあつて輸出が増え、世界のグローバルチェーンへの仲間入りを果たしつつ

あります。地元の人々を雇用して地道に技術を根付かせてきたのも、日本企業の大きな特徴です」と、JICA研究所の細野昭雄シニア・リサーチ・アドバイザーは説明する。一時は落ち込みを見せた日本の投資も近年は拡大を続け、自動車産業のみならず、さまざまな業種に広がっている。

しかし、その広大な面積から見ても、中南米はひとくくりにできない。経済成長が目覚ましく開発途上国を卒業した国もあれば、まだまだ貧し

中南米の課題に 日本ができること



©Kosuke Okahara



©Kenshiro Imamura



©Shinichi Kuno



©Kosuke Okahara



©Atsushi Shibuya